
ミラクル・ミラクル・ミラクルクル

アストン・ヴォルテクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラクル・ミラクル・ミラクルクル

【NZコード】

NZ176Z

【作者名】

アストン・ウォルテクス

【あらすじ】

かなりの豪邸を持つ、椎野家の次男、椎野 幸亞は双子の妹、

椎野 幸恵と兄の椎野 幸正とは別の高校に通うことになった。

だが、その高校で先生にエロイことをされ、そのおかげで入学式には送れたりと不幸続きだつた。

だが、すぐに友達になつた伊勢 ららやと関北 紅などと一緒に行動すると同時に、色々な出会い、色々な出来事と遭遇する。

これは、そんな彼を中心として、その友達達、家族達、先生方などが繰り広げる、恋愛学園ギャグ推理小説である。

これは、ハーレムなことがたくさん書かれています。そういうものが苦手なかたは見るのをおやめください。また、R15とかあります、15才以下のなかたでも、ハーレムなことは平氣だ！って言う人は見てもいいですし、感想もどしどし書いてください。

それと、評価も是非。

とにかく、これはハーレム要素たっぷりです。

プロローグ～先生と友達と戦い～（前書き）

あらすじに書いたとおりです。

ハーレム要素が苦手な方は見るのをおやめください。

では、どうぞ！

結構長かった～。

プロローグ～先生と友達と戦い～

今日は、俺と妹が高校に入学する日だ。そう、もうじにじでわかると思うが、俺と妹は双子だ。でも、高校は高校でも、同じじゃない。俺は県外の高校、わかりやすく言えば埼玉県にある高校、妹は県内の高校、わかりやすく言えば東京都にある高校だ。これでわかるかどうかは知らないけど、実は、俺の家、椎野家は丁度東京と埼玉の県境にあるんだ。実は椎野家、自慢じゃないけどかなりの豪邸で、リビングは東京、でもお風呂は埼玉、キッチンは東京、でも寝室は埼玉、つていうふうになってるんだ。

それと、椎野家の豪邸には、横幅5m、縦幅20mの室内プールがあり、更には露天風呂なんもある。それに敷地内には大きなゲーム屋があつて、名前は「ミラクルシイノ」店長は、実は俺、椎野幸亜（ゆきあ）だ。俺は、大のゲーム好きでここにはCSやそのソフト、G-Sやそのソフト、V.I.Eや、そのソフト、ここでしか出来ないゲームなどがある。ちなみに、ミラクルシイノは埼玉県にある。

実は言つと、まだ敷地ないには店がある。東京に、大きなレストラン、「ミラクルクルフルファミリー」というレストランだ。ここのお店長は、実は俺の妹、椎野（しいのゆきえ）幸恵だ。自分で言つのもなんだが、彼女はとってもすごい美女だ。さすが名前とおりである。幸せに恵まれるよう、料理は上手で超一流、頭はとても賢くこじらでは博士とまで言われ、運動神経もプロスポーツ選手ぐらいいの運動神経を持ち、声も綺麗で超一流の声優のような声、そして優しく、いつ見ても美しいと思う容姿だった。

彼女は普段の彼女とミラクルクルフルファミリーの店長としての彼女とでは性格がちょっと違うのだ。普段の彼女は基本、あまり自分からはしゃべらず、あまり人ごみの多いところへは行かないが、それはただ恥ずかしいだけ。本当は話したいと言つ気持ちでいっぱい、人ごみのところにもあこがれているらしい。だが、ミラクルクルフ

アミリーの店長としては違う、まるで人が違うかのように、厳しく怖く、うるさい性格だった（勿論それは店員と料理人だけに）。

そして、もう一つお店がある。それは、大きなショッピングセンターである。そこの中は俺と俺の妹の兄貴、椎野 幸正しいの ゆきまさ。彼は、

頭がよく実は言うともう関東では有名な、天才四天王の一人でもある。そして、運動神経もよく、特にサッカーでは関東の大会までいき、その時に大活躍して将来、日本代表として世界に出ることも決定されている。そう、つまりプロサッカー選手である。それに、外見もかなりのイケメンで、女の子達にはすぐに囲まれるらしい。もうそれに恐怖心があるのか、人前に出るのは（特に女の子の前）とても嫌になるらしい。

まあ、そんなこんなでまた言つたが、今日は俺と俺の妹が高校に入学する日だ。

俺は、そんな大事な日でもいつものようにゆっくり起きて、ゆっくり着替えて寝ぼけた顔のままご飯を食べて、歯を磨いたらすぐにはから出て行つた。幸恵はもう張り切りすぎて心臓がバクバクしていたらしいが、もうとっくに家から飛び出し、高校に向かつたと言う。今の話は、執事から聞いたことである。あ、ちなみに、俺の家には執事が一人、メイドが18人いる。その中でも、メイドさんは全員新人で、今は仕事などを椎野家に勤めて今年で40年を迎えるベテラン執事の日野ひのとうそつ。統率から教わっている。今の仕事はお掃除だ。庭の掃除だつたり、部屋の掃除、廊下などの掃除である。

ちなみに、俺の家は実は言うと森の中にある。森の中で東京都と埼玉県の栄え目なのである。そのため、簡単に言つてしまえば、俺の家の周りにある森そのものが庭のようなものである。だが、それを全て掃除するのは大変で、危険もあるため、俺の家の周りを囲んでいる樹の内側の掃除をするのだ。まあ、要するに、幸恵のレストラン、兄貴のレストラン、俺のレストランは森の中にあると考えていい。だが、人の良く見える、道路のそばにある。そして、家も実は言うとそのすぐ近くだ。だから、俺や幸恵、兄貴はそのお店の

間で待つていて、底で合流したら一緒に学校に行っていた。

椎野家は年子である。俺と幸恵は双子、そして、兄貴は今高校2年だ。そして、幸恵と兄貴は同じ高校に通っている。俺はもう一度言うが別の学校だ。そして、その学校には、俺の友達は全員行かず、みんな幸恵と兄貴と同じ高校である。俺は、一人寂しく高校へと向かつた。

俺が通う高校に行くと、なんとも綺麗だ。幸恵と兄貴が通う高校は学園祭などで何回か行ったことがあるが、とっても綺麗だった。だが。こっちのほうがもっと綺麗だ。学校全体が銀色に輝いて見える。まるで銀で出来ているかのような学校だ。

あ、そういうえば、俺達の姿を言つていなかつたつけ？じゃあ、今説明しよう。俺の容姿は真っ黒いロングに大きな目だが眠そうな目をしているらしい。半開き状態だ。そして、後の体つきは普通の体格だ。身長は172cm、体重は・・・秘密。ほら、皆も知られたくないでしょ？

幸恵は、茶髪でパツと見短髪に見えるが、実は言つとロング、ロングをオレンジ色の細長いリボン2つで結んでいるため、そう見えるだけ。あとは、少し大きな目、体が細いが、ボンキュボンな体格である。身長は164cm。体重は聞かされていない。

兄貴は銀髪で短髪、少々何箇所かが跳ね上がっていて、これが特徴。そして、優しそうな目をしていて、体はその顔に合つたぐらいの筋肉質。身長は184cm、体重は適当に言われたが・・・忘れてしまった。まあ、そのうち兄貴に聞くとするか。

まあ、そんな感じの容姿だ。

俺は校舎内に入った。外に出た。なぜならば、校舎に入った瞬間に大勢の人の量に気分を悪くしてしまったためだ。そして、トイレを探し・・・に行く途中になんとも運の悪いこと。吐いた。だがそんな時、一人の少女が声をかけてくれた。

「あ、あの、大丈夫ですか？どうされました？」

その少女・・・いや西堀先生は優しく俺に声をかけてくれた。

・・・皆さんも疑問に思つたことだろう。何故少女なのに先生と言つたのか。それは・・・。左胸に名札がついてあつたためだ。だが西堀先生は、小柄な人で声が幼い声だつたため、その名札を見る前まではてつきり生徒かと思つた。まあ、見る前と言つても数分いや、数秒と言つたところだが。

「お手洗いなら、あそこにありますよ。椎野君。何なら一緒についでいってあげましょうか？」

西堀先生はもしかしたら面倒半分でそういうふうにしたのかもしがれないと口にした。

『一緒についでいってあげましょうか?』といつ言葉だ。いや、もしかしたらその意味はトイレの前までという意味なのかもしがれとが、普通は。普通の人ならば。

『トイレの中までついでいってあげましょうか?』と解釈してしまふ。

だが、俺は自慢じゃないが結構な変人なため、そんなことだらうとは思いつつ、

『トイレの前まで』と解釈した。だが、こんなことを考へる暇があつたらすぐにトイレに行け!と思うかもしれないが、無理な質問だ(質問なのか?)。なぜならば、西堀先生にあそこを握られ、がつちりと抱き疲れているからである。いや、彼女は気づいていないみたいだが、完全に俺の、いや、男の大事なところを掴んでいる。左手で、それもがつしりと。更に、右腕で俺が動けないように抱きつき、顔が近い。吐いた匂いが届かないのだろうか。もうあと数cmと詰つところだ。だが、西堀先生は変なことを言つ。

「あなた、いい匂いがするね~」

マジか!と俺は思つた。右手で口を押さえ、左手でお腹を支えて、丁度背中が30度くらい曲がり、会釈をしている形をしているが、そのままの姿勢で目だけが大きくなつた。

「なんか、ローズマリーのいいにおいがする。あなた、香水つけてる?こここの高校は香水は禁止なのよ。プリントにかけてなつたかな

？」

西堀先生の顔がどんどん近づいてくる。俺の目は、かなりおろおろしていた。すると、西堀先生はいきなり姿勢を正しくして、俺の姿勢も正しくし、俺の手を引っ張りながらトイレに連れて行つた。そう、全身が赤色でスカートをはいているかのようなマークをしているトイレに……。

「うう・・・に、西堀先生、何をしてくれるんですか！」

俺は怒鳴つた。真剣に怒鳴つた。だが西堀先生は反省していないのか、まだ笑つている。そう、酔っ払つてゐるそこの女性のように。

「うひひ～・・・もうじょろじょろにゅうがきゅしきはじまりゅかりやね～（うひひ～・・・もうそろそろ入学式始まるからね～）」
彼女はウロウロしながらそいつた。座つた。そしてまた立ち上がつた。すると、座つたときの振動で目を覚ましたのか、突然真剣な顔になり、俺を体育館まで引っ張つて行つてくれた。

ちなみに、トイレでは、女子トイレから何とか脱走して男子トイレに入つた俺だが、俺の用（気持ち悪い方の）をすますと同時に西堀先生がやつてきて個室に入つてハーレムなことをした。されたうん、「された」の方が合つてゐる。そのおかげで先生は上機嫌で酔っ払いのようになり、俺はまた気持ち悪くなつた。

体育館に着くと、本当にもうそろそろ始まると言つといふだつた。俺は、匍匐前進ほふせんしんを頑張つてしてギリギリ自分の席に座るのに間に合ひ、セーフといった。だが、隣の男子、富岸みやぎしゆう雄大に

「アウトだよ。だつて、もう入学式終わるもん」

といわれた。俺は西堀先生の意外な発言のときのように今度はいい姿勢のまま硬直した。口をポカンとあけ、目を大きくして。

そして、入学式が終わると、俺はこの学校の校長、藤林ふじばやしりん林太郎

ふじばやしりんたろう

校長に呼ばれた。叱られた。

『今後こう言つことがないよに!』と叱られた。俺は『西堀先生が俺を使って遊んでいたからです!』といおうとしたが、やめた。きつと、いや絶対もつと叱られると思つたからだ。

『次こう言つことがあつたら、退学させるからね』と校長は言つた。だがそこに西堀先生がやつてきて、今までのことを話していた。それを聞いて校長は今回の件は、特別に聞かなかつたことにし、何も罰を与えることをしないてくれた。だが、次こう言つがあればそのときは覚悟しろ、と言われた。

「ありがとう」ございました。失礼しました」

俺は校長のそばから離れると、すぐに教室に向かつた。そこには男女同じ位の人数でいた。俺のクラスは1・Vだつた。今年の一年生はかなりの数だと言つ。およそ1万。まあ、それでもこの学校にはかなりの空きがあるが。それを知つてしまえば、この学校はどれくらいの大きさなのだろうか、と思えるだろう応えてしまえば、きっと驚くであろう。東京フィズニィランド（ネット上でなく、三次元の方で言えば、東京ディー・一〇〇〇〇〇のこと）4個分だ。

俺もこれを聞いて驚いた。それは、俺のクラスの中でとっても頭がよさそうな男が言つていた。ちなみに、俺にはすぐに友達が出来た。2人。まず一人目は、赤髪で猫のような目、そして少しだけ、キバが出ていて、イタズラが好きそうな男の子、そして、ネックレスもしていて、一日見ただけで結構オシャレ好きだな、ということがわかる。名前は関北 紅。

彼は、好きな色は赤でチャームポイントは赤らしく、得意な教科は国語らしい。意外、と俺は思った。

そして、もう一人。それは俺が教室に入ったときからずっと紅としゃべっていた女の子で、名前は伊勢 ららや。

彼女は、俺の隣の席だ。そして、皆も思つてゐると思うがこの名前。ちょっと変わつた名前だ、と思つだろう。少なくとも、俺は思つた。そこで、「ららや」とはどういう意味なのか、尋ねてみたところ・。

・無かつた。この名前に意味などは存在しないらしい。

そもそも、名付けたのはどうちかと聞いてみると、お兄ちゃん、と応えていた。とても変わった名前をつける兄だ、と俺は思った。だが、何故兄なんか聞いてみたところ、父はずつと悩んでいて、「フリミア」か「レレミヤ」にするか迷っていたらしい。そもそも、「フリミア」とレレミヤは何なのか。これは、俺のクラスの中でとっても頭がよさそうな男が勝手にペチャクチャしゃべっていたが、この二つの名前はある2人組みのアイドルグループ、「ミラクルクラミ」の名前で、（ここからはららやから聞いた話だが）父がその大ファンだったらしく、前からその名前にしようと決めていたらしかったのだが、どっちにしようかと悩んでいたところ、底にまだ幼かつた兄が入ってきて「らりりや」といったらしく、それがきっかけでらりやとなつたらしい。

とても深いな、と俺は思つた。

このクラスの担任がガラガラとドアを開けて、教室に入ってきた。生徒達はそれに気がつくと、静まり返つた。そして俺は驚いた。担任は・・・

「皆さん、おはようございます。私は、このクラスの担任になつた、
西堀 彩です。私も、出来るだけ早く皆さんのこと覚えたいので、
頑張つてこれから一年、一緒に過ごしていきましょう!」

そう、今までお世話になつた（というか俺が彼女にお世話をした）人、西堀先生だった。そして、西堀先生の声を聞くと、クラスにいたオタクと見えるやつらは「彩たん萌え~」や「よし俺の嫁決定!」などとほざいていた。一番最悪なのは「彩たんとラブホ行きたいね~」という言葉だった。だが、西堀先生は聞こえていないのか、色々と話していた。そして、いつの間にかこのクラスの学級委員が決まり、名前は、先ほど、ミラクルクラミの説明などをしてくれたこのクラスでもつとも頭がよさそうな男、瀬谷 泉だった。そして、副学級委員には入学式に俺に説明をしてくれた宮岸が、そして紅が生活委員、ららやが放送委員になつた。

まあ、それも当然だ。紅の場合はイタズラが好きそうな性格だが明るく、しゃべっているうちに责任感が強い、と感じたからだ。そしてららやの場合は、ボリュームが大きく、言葉がはつきりと聞こえ、何より声がかわいかつたため、放送委員には向いているはずだ。そして、これは関係ないが、ららやはかなりの美人だつた。そんなことになり午前授業は普通に進み、そして休み時間となつた。

休み時間、俺はなれない初めての学校を見てまわろうと思い、教室から出ようとした。すると、今日出会つてすぐに友達になつた紅とららや、そして、学級委員の瀬谷、副学級委員の富岸に呼び止められた。それは、一緒に構内を見て回らないかということだった。俺は今彼らと同じことを考えていたためすぐにOKを出した。

構内を歩いているうちに、瀬谷と富岸とはすぐに友達になつた。そして、話していくわかつたことは、瀬谷の場合は冷静で物知り、仲間想いと言うことがわかつた。雄大の場合は、ムードメーカーでお人よしと言うことがわかつた。更に、前から雄大と紅は親友らしく、子供の頃からずっと一緒にいたらしい。そのため、2人との話を聞いているとなんだか、聞いているだけで楽しくなつてくる。そんな気がした。

ららやと瀬谷も同じだと思う。そして、一緒に話しながら校内を回り、この学校でたくさんの生徒が愛用する食堂にきた。だが、そんな中で、チャラ男たち数人と不良たち数人が喧嘩をしているところを目撃した。とそこに、浴衣の格好をした一人の少年が入つて、両袖から、全長55cm程度の木刀を一本ずつ取り出して二本手に持ち、チャラ男らと不良らにはむかつた。

「あんたらなにここで喧嘩しとんねん。アホかボケ。ここは食堂や。あんたらみたいなアホボケが来る所ぢやう。さつさと帰り！」

「何だと？お前、もう一回言つてみろ！！」

チャラ男の一人が少年の胸座をつかんだ。少年は右手に持つている木刀で、チャラ男の頭を軽く叩くと、左手に持つている木刀で思い切り首を殴つた。チャラ男はかなり吹つ飛び、食堂の壁にめり込

んだ。

その場は一瞬にして静まり返った。

「お前……よくも……」

「ワイは桜本 葵！ 桜木

「さ、桜本……葵だと……？」

「ヤベヒ・・・早ク」から逃げねえと・・・」

「本格的と名乗る男と知ると、結構有呪う。」

「くつ！葵とか、女の名前じやねえか。だつせえ～～！！」

不良の一人がそういうと、周りにいる野次馬達は更に怯え始めた。

「おはようございます。怒らせました：」

その場にいた野次馬達は、食料を

その場にいた野次馬達は、食料を全て口に放り込んで苦しそうにしているアホらしい男一人意外は全員食堂から離れた。その後、何とか食料を全て口に放り込んで苦しそうにしているアホらしい男も食堂から離れた。食堂の小母さんたちなども実は野次馬の流れに交じつてその場から離れていた。そして、その場には、俺と紅、ららやと雄大と瀬谷、桜本 葵、不良らとチャラ男らだけになつた。

その場に、窓がいきなり開きだし、おおきな音を立てながら、強風が食堂を駆け回り、その場にあつた紙等を飛ばしていた。そして、紙吹雪が俺達の周りに吹いた。

不良らの数人がこちら（俺達の方）を見る。身構える。俺達も身構える（紅と雄大が。ちらやは俺の後ろに隠れ、俺はだ突つ立つていて、瀬谷は何かを考えているかのようなポーズを取っている）。そして、紙吹雪が終わると同時に、皆は動き出した（俺とちらやは

瀬谷以外はぶつかり合い、俺はそのまま硬直し、ららやは俺の背中にくつき、瀬谷は何かの拳法のような構えをしながら少しづつ後ろに下がっていた）。

「半殺しにしてやるぜ！」

不良らが紅と雄大に攻撃を仕掛けながら言つた。だが紅は鼻で笑い、雄大は真剣な表情で相手を吹き飛ばしていた。

「そんなこと、お前に出来るかな？」

「今こそここに武術を降臨すべし！ 龍断拳！」
りゅうだんけん

「ぐわあああああああつ！」

紅は不良のパンチをガードすると、まるで蛇のように相手に巻きつくかのような攻撃を仕掛けた（つまり、ガードから相手に引っ付き攻撃をすること）。雄大は人が変わったかのように入相が変わり、見たこともない武術を使って相手に攻撃をした（両手を半時計周りに回し、右手と左手で龍の口のような形を作つて相手の懷に攻撃する技。それとともに、龍の形をした衝撃波が飛び、ぶ）。

「桜本一刀流抜刀術・竜骨！ 斬皇狼！」
せんじょうろう

桜本が、木刀の中から本物の刀をだし（つまり、木刀が鞘さやになっていた）、相手を切りつけた。チヤラ男らと不良らは、そのまま桜本を通過すると、ピタッととなり、しばらくすると、服が全部切り刻まれていて、全裸になつた（パンツははいている）。そして、チヤラ男らは全員逃げ出し、不良らも全員逃げ出した。逃げ出したはずだが。なんと、今度は窓から大量の不良たちが現れた。どこぞのホラーゲームのようだ。そして、そいつらはららやに目をつけると、不良たちは皆ららやのところに来た。

ららやは俺にもつとくつづく、もしかしたらこのままだと俺の背骨が折れるんじゃないかと言うぐらいまでくつづく。だが俺は耐えた。そして不良たちがもう数mというところまで来ると、自然とやらやをかばい、やらやを後ろに移動させた。俺はそのときピンときた。

「そうだ！ これはゲームだと思えば・・・。テクニカルトレーニン

グスバトラーだと思えば！」と。

テクニカルトレーニングバトラーとは、自分の体全部がコントローラーになり、右フックをすれば、ゲーム上のプレイしているキャラも同じ瞬間で同じ速さで右フックをするというゲームだ。つまり、これは自分自身がゲームの中にいるような感覚で、俺は大のゲーム好きだったため、これももうプロ並だ。そして俺は、このゲームを利用しようと思ったのだ。

まず、一番近い敵には右ナックルからしゃがみこんで左足で相手をよろめかせて、アッパーをした。それで一番近かつた不良はKOした。

次に近いやつ、今度は3人いつぺんに倒した。まず、しゃがみこんで左足で相手をよろめかせて中腰になり、右足で俺からみて右にいる不良から左にいる不良まで周し蹴り、そしてジャンプして左足で顔をけり、右足で首を蹴った。これで三人まとめてKOさせた。

「ヒュ～ヒュ～コッキーもなかなかやるじゃない！」

そういったのは紅だ。実は、紅もチャラ男の一人だと黙つてもいいぐらいのものだった。だが、普通のチャラ男とは違い、常に優しく明るかつた。そして正義感も強いという感じだ。だがやはりイタズラ好きな性格からちょっとチャラ男のような言葉を発するときもあつた。

「中々やるね。よ～し！かたをつけよう！！」

今度、そういったのは雄大だった。雄大はそういうと、一気に30もの不良たちをやつつけた。紅も負けじとどんどん不良たちを倒していく。すると、瀬谷が一人にとび蹴りを行い、運良くそいつがかなり吹っ飛び、まるでドミノのように相手を倒していく。

そういうしているうちに不良たちは全員撤退し、その場には俺とららや、紅と雄大、瀬谷と桜本だけになつた。

「すまないな。桜本・・・だっけ？こんなことになつてしまつて。

それとありがとう

「なに言つとんねん！ 礼を言つのはこいつのまゝやわ。おおきにな。それにしてもあんたら中々やるやないかい。なんや？ どこかで武術とかならうとつたんか？」

「俺はドラマとか見ててよくいづりシーンがあつたからまねしてみただけだ」

「俺はある人から武術を教わつていました」

「俺はゲームで・・・」

それぞれ、紅、雄大、俺の順番に言つていつた。そして瀬谷は「俺は勇氣を振り絞つてやつただけだ」とえらそつと言つた。それを見て俺は苦笑いをしていた。

「あの、皆ありがとう。危うく、私捕まるといひだつた。本当にありがとうございました。特に幸亜君」

「うやは、最後の言葉はちよつとおふざけもはいつているような感じで言つて、ウインクをしてみせた。それをみて俺は苦笑いをして、その後、桜本も一年生だというから、一緒に校内を周りに行つた。と思いきや休み時間が終わると言つチャイムが鳴り、昼飯の時間になつた。丁度俺達は食堂にいたため、一番で昼飯を食べた。ただ、俺は幸恵が作つてくれたお弁当を食べて、その中の豚カツを紅に奪われた。だが、紅はその美味さに感動したのか、俺にこれを作つた人は誰だと尋ねてきた。そして、妹というと、その場で妹を話題として楽しんだ。そして、これを話し始めたときに思つたとおり、皆妹に会いたいと言い出してきた。

こうして、今日の学校生活は終了した。

家に帰るときには、ちらりやが一緒に道で、今日から一緒に帰ることにした。それを知つた紅は、うらやましそうに俺に色々といつてきた。だが、瀬谷が他の女の子とかえつてゐるところを見ると、それもうらやましそうに瀬谷にも色々といつていた。そして、その場を通る女子高校生に声をかけていた。このことから俺は、「紅は女性好き」ということがわかつた。

そして、家に帰る途中、俺は兄貴と幸恵に会つた。

プロローグ～先生と友達と戯い～（後書き）

次回からは短いです。多分。

五分五分ですね。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176z/>

ミラクル・ミラクル・ミラクルクル

2011年12月7日22時51分発行